

北海道高等学校遠隔授業配信センター (愛称：T-base) を知っていますか？

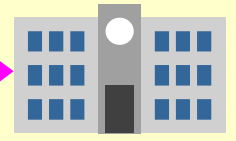
北海道教育庁学校教育局高校教育課（令和6年（2024年）4月）

北海道教育委員会では、道立高等学校の小規模校化や、広域分散型という本道の地域特性を踏まえ、令和3年（2021年）4月、北海道有朋高等学校内に「北海道高等学校遠隔授業配信センター」（愛称：T-base）を開設し、小規模校の魅力化を図っています。



【配信センター】

遠隔授業
進学講習



【地域連携特例校等】

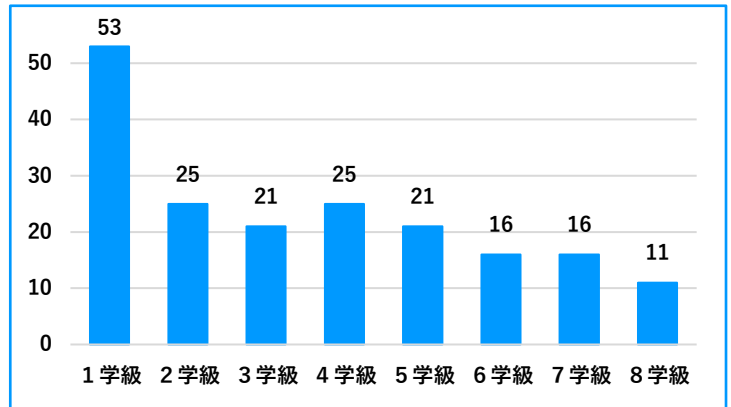
1 開設の背景

中学校卒業生数の減少等により、道立高等学校の小規模校化が進んでいます。令和3年度（2021年度）においては、第1学年が1～3学級の道立高校は99校（52.7%）と半数以上を占めており、第1学年1学級の高校は53校と最も多くなっています。

小規模校のメリットとしては、生徒一人一人に対するきめ細かな指導の充実や地域の教育資源や人材を活用した教育活動の充実がある一方、次のような課題があります。

【小規模校における課題】

- ・ 教員配置数の減少
- ・ 設置科目数の減少
- ・ 切磋琢磨する機会の減少
- ・ 部活動の停滞の懸念



【令和3年度 道立高等学校（全日制）第1学年の学級数別学校数】

2 北海道高等学校遠隔授業配信センター（T-base）のコンセプト等

小規模校化の課題として、生徒の興味・関心や進路希望に対応した選択幅の広い教育課程の編成の困難さや、切磋琢磨する機会の減少などがあります。

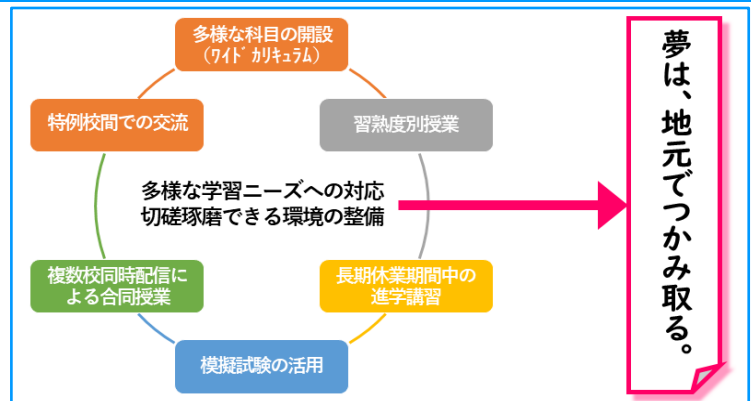
これらの課題に対応するため、令和3年（2021年）4月、北海道高等学校遠隔授業配信センターを開設しました。「夢は、地元でつかみ取る。」というキャッチフレーズのもと、遠隔授業の配信はもとより、進学講習などにも取り組むことで、小規模校の魅力化を図っています。

開設目的

どの地域においても、自らの可能性を最大限に伸ばしていくことのできる多様で質の高い高校教育を提供し、地域の小規模な高校の教育課程や教育活動の充実を図ること

実施体制（令和6年度）

- センター長（有朋高校の校長が兼務）
- センター専任の教員24名
 - ・ 次長（教頭）1名
 - ・ 教諭23名（国語、地理歴史、公民、数学、情報、理科、音楽、書道、外国語）



【北海道高等学校遠隔授業配信センターのコンセプト図】

配信対象校（令和6年度）

31校（地域連携校29校と離島の道立高校2校）

主な取組

- ・ 配信センターからの遠隔授業の実施（習熟度別授業、多様な科目開設、遠隔合同授業）
- ・ 配信センターからの進学講習の実施
- ・ 遠隔システムを活用した連携校等間における交流等（連携校等間の遠隔授業、生徒会交流、教員研修）

Tele Teaching（遠隔授業を）
Tied Triangle（配信センター、受信校、道教委の三者がしっかりと結び付いて）
Tonden base（屯田から配信する拠点）

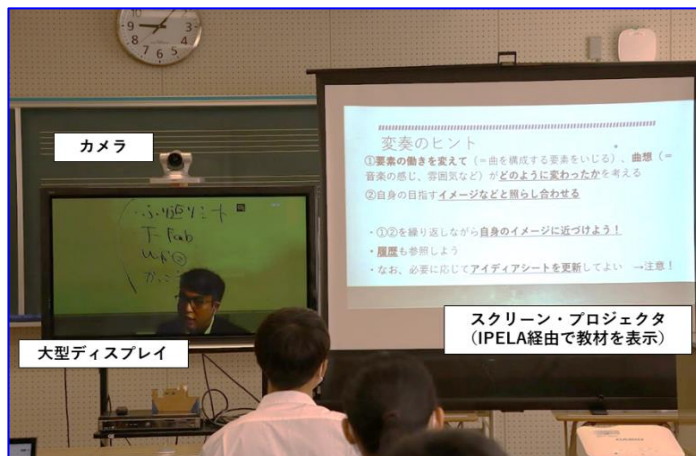
T-base

3 遠隔授業の実際

T-baseでは、遠隔授業の配信に当たって、Web会議システム（Google Meet等）などのクラウドサービスを活用しながら、生徒の実情、教科の特性等を踏まえ、効果的な遠隔授業の配信に取り組んでいます（令和5年度まではビデオ会議システム（SONY製のIPELA）を基本として活用）。



【 配信側（使用機器等の紹介含む）の様子 】

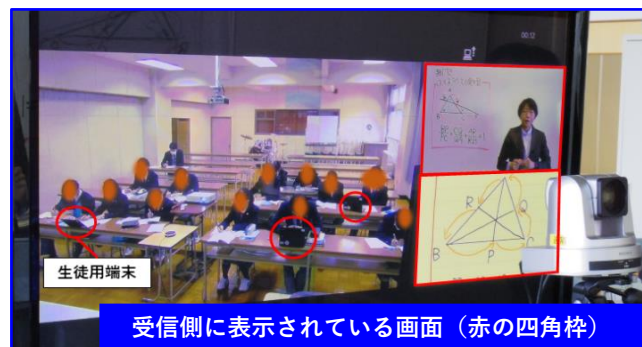


【 受信側（使用機器等の紹介含む）の様子 】

配信方法例① 数学 A

配信方法例①は、ビデオ会議システム（IPELA）を活用した遠隔授業です。ここに掲載している画像は、ホワイトボードを使用して問題の解法を説明している様子です。

授業者（配信者）はワイヤレスマイクやイヤホンを使用して音声面での利便性を確保するとともに、ビデオ会議システム（IPELA）のほかに、Google Classroomを併用して、課題を提示したり、課題提出を行わせたりという工夫も行っています。



配信側（使用機器等の紹介含む）の様子

配信方法例② 英語会話

配信方法例②は、配信方法例①で使用しているビデオ会議システム（IPELA）ではなく、Web会議システム（Google Meet）を活用した遠隔授業です。

映像スイッチャーを使用して、生徒に提示するコンテンツを適宜切り替えるなどの工夫を行っています。



配信方法例③ 書道 I

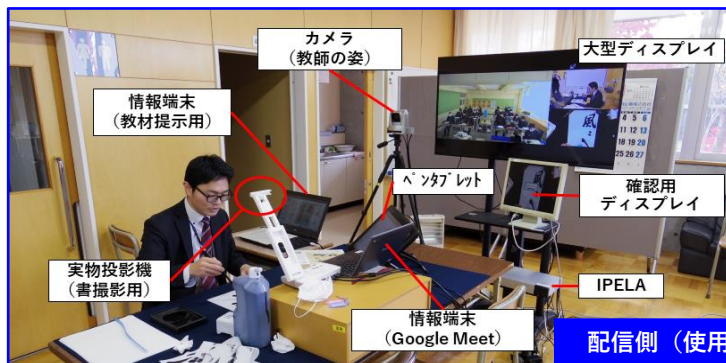
配信方法例③は、ビデオ会議システム (IPELA) と Web会議システム (Google Meet) を併用した遠隔授業です。

各生徒の手元には情報端末があり、Google Meet でつながっています。Google スライドの内容が共有されるとともに、生徒の手元を確認できるようになっています。

また、書く姿勢が大切なことから、実物投影机で上から見た様子を配信するとともに、横から見た教員の様子を受信校に配信しています。



受信側に表示されている画面 (赤の四角枠)



配信側 (使用機器等の紹介含む) の様子



4 紙面座談会「T-baseってどんなところ？」

T-baseで実際に遠隔授業を担当している先生に、T-baseのことについて聞いてみました。
(教員の在籍等は令和4年3月現在)

井口先生

国語担当。T-baseは5校目の勤務校。ICT関係は苦手だったものの、T-baseでの勤務を通じてICTスキルが向上中。

杉浦先生

理科担当。T-baseは2校目の勤務校。新しいことに挑戦することが好き。ICTを活用した効果的な授業づくりを日々模索中。

T-baseでの勤務を希望した理由を教えてください。

井口先生

地方の高校では、夢を叶えられないといって地元を離れる中学生が多くいることを過去の勤務経験から知っており、課題意識を持ち続けていました。遠隔授業を配信することで地方の子たちが学びたいことを学べ、進路を実現するチャンスを与えられるという事業を知り、役に立ちたいと思い希望しました。

杉浦先生

理由は2つです。1つは新しい組織の立ち上げに関わってみたいということ。全国的にも珍しい事業なので、どんな仕事ができるのかワクワク感を持って希望しました。もう1つは自分の授業について見つめ直せるだろうということ。遠隔授業に向けて、今までの授業を一から作り直す必要がある。そうした環境に身を置いてみたいという気持ちがありました。

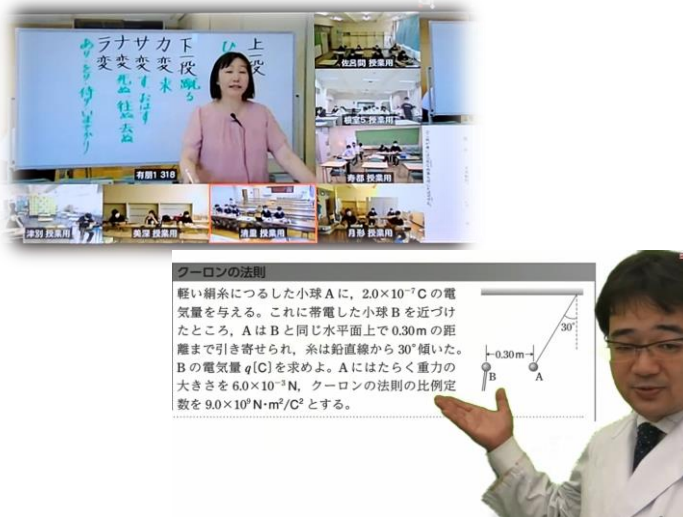
T-baseに勤務してイメージの変化はありましたか。

井口先生

配信など技術的なことは専門の方が担当すると思っていましたが、機器の接続や調整など自分でやらなければならないことがたくさんありました。もちろんT-baseの先生方が積極的にサポートしてくれます。

杉浦先生

勤務する前の「遠隔授業」は、予備校の衛星授業やYouTubeなどのオンデマンド型のイメージがありましたが、遠隔会議システムを使った双方向型であったり、生徒の1人1台端末の状況を踏まえてGoogle Meetを使った授業をしたりと、想像と大きく違いました。



T-baseで勤務する上でのやりがいは何ですか？

井口先生

受信校の先生方と遠隔システムを活用して情報共有している際、生徒の進路について真剣に話をしていると、1人の生徒の成長をたくさんの大人がサポートし見守っている、その一員に自分がいることにやりがいや楽しさを感じています。

杉浦先生

教材研究を充実させることです。対面授業と同じようにできることと、遠隔ならではのことがありますので、授業や教材の作り方、評価の在り方などを工夫・研究しています。また、遠隔でできる生徒実験や、生徒の端末を使ってできることを試行錯誤する中で、自分の授業の幅が広がったと感じています。

遠隔授業を担当する難しさや楽しさは何ですか？

井口先生

遠隔授業では、教室で何気なくやっている見取りができません。一方、その難点を解決する改善策も次々と生まれており、生徒と共に技術の進歩を享受しています。その他、基本的に授業時間にしか生徒と顔を合わせませんので、放課後の補習などができません。生徒に自主的に頑張ってもらうような授業の在り方を模索中です。

杉浦先生

難しさは、受信校との情報共有と生徒理解です。例えば、時間割変更や生徒の状況把握です。職員室での情報共有ができない分、受信校の先生と連絡を取り合っ確認をしながら進めています。生徒とも基本的に授業でしかコミュニケーションの時間がないため、理解度を把握したり様子を観察したりする手段が限られます。このため、振り返りシートの自由記述欄や提出課題に返信コメントを書いて理解度や質問対応などをしています。また、進学希望者に向けてGoogle Classroomを使って個別の課題を出して添削するなど、遠隔ならではの工夫が必要な場面があります。

楽しさは、新しい形の授業を生徒と一緒に模索できることです。今年度から1人1台端末の状況を踏まえ、Google Meetでの授業に取り組んでいます。生徒によって個人差がありますが、お互いに教え合いながら端末を上手に使っています。アプリを使い、今までできなかった「その場で実験データを共有する」や「生徒の考えをアンケート集計して提示する」、「ポスター代わりにJamboardを使って発表する」など少しずつ授業の形が広がっています。

T-baseでの勤務を通じてスキルアップしたり、考え方が変わったりしたことはありますか？

井口先生

私はパソコン操作が苦手でしたが、T-baseの先生方が教えてくれます。使いこなすレベルには到達できるかはわかりませんが、「できない」「やらない」と思い込むのは早計だなと思います。

杉浦先生

授業で使う機材やアプリの知識が増えました。このおかげで授業を作るときの自由度が増したと思っています。

また、校内外で研修の講師役や発表をさせていただく機会があり、自分の理解の見直しや伝え方など勉強になっています。

T-baseでの勤務を踏まえ、今後はどのような教職キャリアを積んでいきたいですか？

井口先生

次の勤務校では、T-baseで身に付けたICTスキルを生かしつつ、進路指導についてさらに学びたいです。さらにもう1校勤務するなら受信校に勤務し、T-baseの取組を受信校側から経験するのもいいかなと思っています。

杉浦先生

今、いろいろ新しいことに挑戦させていただいているので、ここで実践したことを、異動後の学校でも生かしていこうと考えています。

その他、全道の先生方に対して、T-baseについてアピールしたいことがあればお願いします。

井口先生

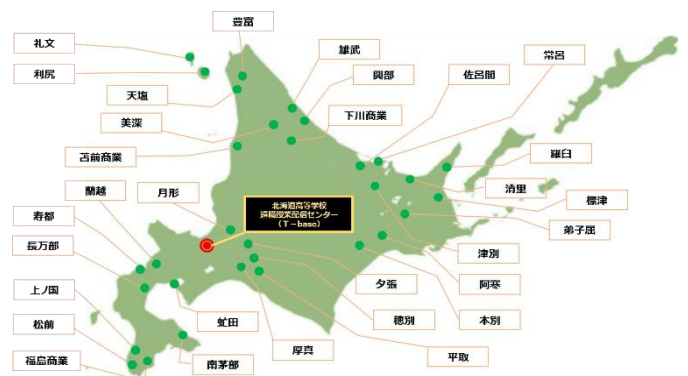
生徒には授業でしか会えないからこそ、授業は本物でなければならないですし、授業を通して生徒の成長にしっかり関わらねばなりません。機器の扱いに自信がないという人も、「こういうことがしたい」というビジョンがある人は大丈夫です。

杉浦先生

好奇心とチャレンジ精神を持っていただければよいかと思います。新しい組織ですのでもだまだ課題はありますが、その分、いろいろなことに挑戦できます。

先生方、どうもありがとうございました。

令和6年度（2024年度）の配信対象校



(注) 令和3年度は道立高校27校に配信。令和4年度以降は新たな地域連携校を加えて配信（令和4年度29校、令和5年度からは31校に配信）。

